

主語接触関係節について*

熊本 千明

On Subject Contact Relatives

Chiaki KUMAMOTO

要 旨

関係詞は、一般に、目的格の場合には省略が可能であるが、主格の場合には省略できないといわれる(e.g. *I liked the woman you invited \emptyset for dinner last night. / *?I liked the woman \emptyset came for dinner last night.* (Lambrecht 1988:320))。しかし、非標準的構文といわれながら、主格の関係詞が省略された形は、しばしば、話し言葉、書き言葉に現れることが指摘されている(McCawley 1981, 1998, Lambrecht 1988, Doherty 1993, 2000, den Dikken 2005) (e.g. *There's one woman in our street went to Spain last year. / There are very surprising things happen in this world. / I have one student can speak five languages.* (den Dikken 2005:694 - 696))。こうした構文を、Jespersen(1961)は、'subject contact clause'と呼ぶ。本稿では、Doherty(1993, 2000)にならって、'subject contact relative' (主語接触関係節) (以後、SCR) という語を用いることとし、この構文の意味的特徴、統語的特徴、語用論的特徴を探り、容認度に関わる諸制約を一律に説明することができるかどうか、検討する。

これまでに提案されてきた説明においては、SCRが関係節であるか、主節であるか、という点に注意が向けられてきた。McCawley(1981, 1998)は、先行詞との結びつきが弱い、ある種の関係節を、「疑似関係節」(pseudo-relatives)と呼び、主節が表層において従属節に格下げされたものと考え。その上で、SCRはこうした疑似関係節に起こるとする。Lambrecht(1988)は、物語の冒頭に現れ、関係節が主節として機能する提示的關係節構文(presentational relative construction)との類似性を示唆し、SCR構文は、情報構造上の要請が文法化(grammaticalization)された構文であるとして、「提示的融合構文」(presentational amalgam construction)と名付ける。den Dikken(2005)は、SCRを主節にとらえ、SCR構文は、話題を表す最初の節が導入する焦点について、二番目の節がコメントを行うという情報構造が統語化されたものであると考える。これらの議論に対し、Doherty(1993, 2000)、Haegeman et al.(2015)は、SCRが主節ではなく従属節である証拠を挙げ、SCRに対しては、関係詞化による説明が適切であると主張する。また、Doherty(1993, 2000)は、SCRの分布に関する制約は、先行詞が指示的であるか否かという点に大きく依存すると、指摘する。

SCR を伴う構文は多様であり、情報構造に注目するだけでは、その特徴を十分に捉えることができない。ここでは、上述の議論を追いながら、それぞれの分析の問題点を指摘し、Doherty(2000)の提案にそって、先行詞の名詞句の指示性という観点から、SCR の容認可能性を考える。SCR が典型的に現れる存在文、所有文、指定コピュラ文の考察においては、非指示的名詞句である「変項名詞句」(西山 2003、2013)の概念が重要であると思われる。さらに、Doherty(2000)が示唆するように、形容詞句による後置修飾にも SCR と同様の制約が見られるのかどうか、検討する。

【キーワード】 関係節、疑似関係節、主語接触関係節、形容詞句による後置修飾、情報構造、提示的機能、存在文、(倒置)指定文、措定文、指示的名詞句、変項名詞句、叙述名詞句、特定・非特定的名詞句

I. 序

まず、SCR 構文の例をいくつか、挙げておくことにしよう。SCR は、主節が *there* 構文である場合、主節の述語が *have* であり、主語が一人称代名詞である場合に典型的に見られるとされるが、様々な構文に現れる。

- (1) a. There's a woman wants to see you.
b. There's lots of people (have) tried to help him.
c. It was John said it.
d. I had an auntie lived here.
e. You were the one came in and told us that you'd taken a picture.
(Haegeman et. al. 2015:62)
f. The only one can do it is John.
g. Any man can't fight his friends had better be dead.
h. They're the kind of people would do it. (Doherty 1993:158)

(1 a)、(1 b)は存在文、(1 c)は *it* 分裂文、(1 d)は所有文、(1 e)、(1 f)は(倒置)指定文¹、(1 g)は数量詞を伴う文、(1 h)は措定文である。

SCR 構文は非標準的な構文であり、容認度の判断には幅があるが、(2 b)のような例は、決して容認されないという。

- (2) a. I have one of my uncle was an engineer and he told me...
b. *? I asked one of my uncles was an engineer and he told me...
(Lambrecht 1988:321)

there 構文、*have* 構文を主として考察する Lambrecht(1988)は、これらの構文には、談話に新たな指示対象を導入する機能があることに注目する。主節の述語が提示機能を示す *have*

である(2a)は容認されるが、ask では提示機能を示すことができないため、(2b)は容認されないと説明する。

他方、Doherty(1993、2000)は、語用論的な説明ではなく、意味論的な説明を試みる。there 構文、have 構文に限らず、SCR が現れる様々な文脈を観察すると、SCR が主語位置に現れる(1f)のような例もあり、情報の新しさや焦点といった観点からは、説明が見つからないことが分かる。Doherty(2000)は、(3)が容認されないのは、主語名詞句が指示的であるためであるという。

(3) *A man speaks Irish walked into the bar. (Doherty 2000:91)

Doherty(1993、2000)は、SCR は修飾される名詞句が非指示的な名詞句である場合のみ認可されるとするが、(4)のような例は、この一般化から外れてしまうという、問題点も指摘している。

(4) I knew a man owned twenty restaurants. (Doherty 2000:92)

これまでのSCRの議論においては、どのようなタイプのSCR構文を考察の対象とするかによって、その特徴の説明の仕方が大きく異なっている。SCRが現れる多様な構文のもつ意味的、統語的、語用論的特徴と、先行詞となる名詞句の意味機能を、詳細に検討することが必要であると思われる。

次節に進む前に、西山(2003、2013)による、場所存在文、絶対存在文、指定文、所有文の意味構造の分析にふれておくことにしたい。² 取り上げるのは日本語の例であるが、対応する英語の構文の考察に有益である。

(5) 場所存在文 例:隣の部屋に母がいる。

L二、A ガアル/イル。

L:場所辞(場所を指示する指示的名詞句)

A:存在主体(個体を指示する名詞句) (西山 2013:253)

(6) 絶対存在文 例:花子の好きな科目がある。

a. [x が花子の好きな科目である]

b. 花子はある科目が好きだ。

命題関数(6a)のxを埋める値が存在する。

(7) 倒置指定文 例:花子の好きな科目は数学だ。

a. [x が花子の好きな科目である] (= 6a)

b. 花子の好きな科目は何か。(倒置指定疑問文)

命題関数(7a)のxを埋める値を指定する。 (西山 2013:255)

(8) 所有文 例:太郎は妹がいる。

太郎は [[x が a_i の妹である] を満たす x の値が存在する]

「AはBがいる/ある」は、「Bがいる/ある」の部分絶対存在文の意味構造をなし、文全体は、Aの指示対象に「Bがいる/ある」で表わされる属性を帰す。

(西山 2013:293)

(1)に見られる *there* 構文、*have* 構文は、西山の規定による、絶対存在文と所有文の例であると思われる。こうした区分を念頭に置いて、次節以下、これまでに提案されてきた分析を少し詳しく見ていくことにしよう。

II. 疑似関係節と SCR

Prince(1981)は、SCR が生じるのは、(9)の例に見られるように、(10)の特徴をもつ文に限られると考える。

- (9) a. We got a lot of fancy Cadillac cars don't tip.
b. I had a great-great-great-grandfather or something fought that Revolution.
c. There was a piece of four-inch bone never mended. (Prince 1981:247)

- (10) 統語的には主節であるものが情報的には弱く、活性化された(evoked³)主語(通常は *I*)あるいは、虚辞(dummy)主語(*it*, *there*)と意味的に弱い動詞(*be*, *have*, *know*)を伴い、統語的には従属的である節(関係節)が高い情報価値をもつ文。

(Prince 1981:247)

そして、(9 a-c)に対応する意味を表すのは(11a-c)ではなく、(12a-c)であるという。

- (11) a. We have a lot of fancy Cadillac cars which / that don't tip.
b. I had a great-great-great-grandfather or something who / that fought that Revolution.
c. There was a piece of four-inch bone which / that never mended.

- (12) a. A lot of fancy Cadillac cars don't tip.
b. A great-great-great-grandfather or something fought that Revolution.
c. A piece of four-inch bone never mended.

これを受けて McCawley(1998)は次のように述べ、

- (13) ...I will mention Prince's(1981:247)observation that omission of a subject relative pronoun, which is normally not allowed in modern English, is extremely common in class of cases that appear to coincide with what I call pseudo-relatives...

(McCawley 1998:463)

SCR は、通常の制限的關係節ではなく、McCawley(1981,1998)のいう「疑似關係節」(pseudo-relative)に生じるものであると示唆している。疑似關係節には、通常の制限的關係節とは異なる特徴がいくつかあるとされる。順次、見ていくことにしよう。

疑似關係節の例は、以下のようなものである。

- (14) a. There are many Americans who distrust politicians.
b. Paul has a brother who lives in Toledo.

c. Nixon is the only President who has ever resigned.

d. I've never met an American who understood cricket. (McCawley 1998:462)

疑似関係節と通常の制限的關係節の統語的な違いの一つは、話題化に関するものである。名詞句を話題化する場合、先行詞と関係節を共に前置することが制限的關係節では可能であるが、疑似関係節では、容認されにくい。また、先行詞のみを前置することは、制限的關係節では容認されないが、疑似関係節では、それほど不自然ではない。

(15) a. The fish that I caught, Bill ate.

b. *The fish, Bill ate that I caught. (McCawley 1981:105)

(16) a. ??Many Americans who distrust politicians there have always been.

b. ? Many Americans there have always been who distrust politicians.

(McCawley 1981:106)

次に、制限的關係節では、先行詞と関係節の間に語句を挿入することはできないが、疑似関係節では可能であるという違いがある。⁴

(17) *Tom cooked a dish, as you know, that I always enjoy.

(18) There are many Americans, as you know, who distrust politicians

(McCawley 1981:106)

また、関係節内の要素を取り出すことは、制限的關係節では許されないが、疑似関係節ではそれほど容認度が低くない。

(19) *Which crimes does Oprah interview people who commit Ø?

(20) a. ? Which person do you think there are many Americans who distrust Ø?

b. ? What company does Paul have a sister who works for Ø?

(McCawley 1998:461)

さらに、制限的關係節は固有名詞に付随することができないが、疑似関係節ではそれが許容されるという相違がある。

(21) *I cursed (only) John that didn't show up at the meeting.

(22) ? There was only John that didn't show up at the meeting.⁵

(McCawley 1998:461)

そして、制限的關係節では容認されない主格の關係詞の省略が、疑似関係節では可能である。

(23) I have a friend Ø called me yesterday. (McCawley 1998:463)

制限的關係節と疑似関係節には、意味的な違いもある。(24a)は、Americans who like opera を基準にして、そのうちの多くがメットラジオ放送を聞くと解釈されるのに対し、(24b)は、Americans を基準にして、その中にオペラ好きの人割合が多いと解釈されるという。⁶

(24) a. Many Americans who like opera listen to the Met radio broadcast.

b. There are many Americans who like opera. (McCawley 1981:113)

数量詞が N' + 制限的關係節と結びついた場合に、制限的關係節は N' と共に束縛変項の変域

の決定に関わるが、疑似関係節は束縛変項の変域の決定に関わらないと、McCawley(1981)は説明する。

このように、疑似関係節においては、先行詞と関係節の結びつきが弱く、McCawley(1981、1998)によれば、疑似関係節は通常の制限的關係節と異なり、NPの外にあると考えることができるという。以下の例が示すように、先行詞+疑似関係節は等位接続が可能であり、何らかの構成素をなしているともみなすことができるが、

- (25) There are both many Americans who like opera and many Uruguayans who like hockey, aren't they?

(McCawley 1981:111)

疑似関係節は名詞句内の修飾部として機能しているのではない。McCawley(1981)は、疑似関係節構文は存在文の変種であり⁷、主節が、制限的關係節と同じ表層形式をもつ従属節に格下げ(demote)されたものであると説明している。

McCawley(1981、1998)の観察は、興味深いものであり、(18)、(24 b)のような例は、西山(2003、2013)の「絶対存在文」の概念を用いて考察を深めることが可能であるように思われる。McCawleyは、疑似関係節と先行詞の間の緩やかな結びつきに注目し、疑似関係節の特徴の一つとして、主格の關係代名詞の省略可能性に言及した。次に、主格の關係代名詞が省略されたSCR構文を考察の対象として、関係節が主節的な機能をもつという点に注目した議論を、追っていくことにしよう。

Ⅲ. SCRの情報構造

まず、Lambrecht(1988)による考察を見ていくことにしよう。Lambrechtは、SCRは*there*構文、*have*構文に現れるとし、次の例を挙げる。

- (26) a. There was a ball of fire shot up through the seats in front of me.⁸
b. There's something keeps upsetting him.
c. There's a lot of people don't know that.
d. I have a friend from Chicago's gonna meet me downstairs.
e. I have a friend of mine in the history department teaches two courses per semester.

(Lambrecht 1988:319)

Lambrechtは、こうした構文には語用論的な裏づけがあり、ある情報構造上の要請が、文の統語構造として文法化されたものであると考える。

Lambrechtが議論の出発点にするのは、次のような、昔話の冒頭に現れる*there*構文である。

- (27) Once upon a time, there was an old cockroach who lived in a greasy paper bag.

(Lambrecht 1988:322)

このような構文を、Lambrecht は、「提示的關係節構文」⁹ (presentational relative construction)と呼ぶ。これは、発話の時点で聞き手に同定不可能であると想定される指示対象を談話に導入する際に用いられる構文であり、 S_1 と S_2 の二つの節からなる。 S_1 は提示節であり、新しい指示対象を談話内に位置づける機能をもつ。この指示対象を表すNPは、 S_1 では、文頭ではなく、動詞の後の焦点の位置に現れるが、続く S_2 では、代名詞の形で主語の位置に現れて、トピックとなり、このトピックについての命題が S_2 で表されることになる。

この提示的關係節構文は、先行詞+關係節が複合名詞句をなさないという点で、(28a)の制限的關係節構文、(28b)の同格關係節構文(appositive relative construction)とは、大きく異なると、Lambrecht は、主張する。

- (28) a. The cockroach who lived in the paper bag was very arrogant.
b. The cockroach, who was very arrogant, was hated by all his neighbors.

(Lambrecht 1988:323)

提示的關係節構文においては、 S_2 は、構造的に S_1 と対等であり、關係節は主節として機能している。このことは、二番目の節を加える際、提示的關係節構文の場合は、關係節を繰り返す形にしても、主節を加える形にしても良いが、制限的關係節の場合は、關係節を加える形しか許されないことから分かるという。

- (29) a. Once upon a time there was an old cockroach who lived in a paper bag and who was very poor.
b. Once upon a time there was an old cockroach who lived in a paper bag and he was very poor.
- (30) a. I told you the story about the cockroach who lived in a paper bag and who was very poor.
b. *I told you the story about the cockroach who lived in a paper bag and he was very poor.

(Lambrecht 1988:325)

また、提示的關係節構文の主節+關係節の命題内容は、以下のように、単一の命題を表す単一の節によって表すことができるということも、提示的關係節構文においては、關係節の内容が主張されていることを裏づける。

- (31) Once upon a time an old cockroach lived in a greasy paper bag

(Lambrecht 1988:326)

提示節である S_1 は、命題的には空であり、それまで同定されなかった指示対象の名前を挙げるという(naming)、語用論的な機能をもつのみであると、Lambrecht はいう。

Lambrecht は、McCawley (1981) のいう疑似關係節構文を、提示的關係節構文の意味的な下位タイプであると考え。非標準的ではあるが、疑似關係節構文の意味は、並列する二つの独立節によって表されるという点で、提示的關係節構文と類似点をもつからである。

- (32) a. There are some funerals they really affect you.

(Lambrecht 1988:331)

b. Once upon a time there was an old cockroach; he lived in a greasy paper bag.

(Lambrecht 1988 : 322)

疑似関係節構文の意味は、提示的關係節構文と同様、単文や、二つの節の並列によって示される。しかし、*and* を用いた等位構造によっては示すことができないという、違いがある。

- (33) a. There are many Americans who approve of violence.
 b. Many Americans approve of violence.
 c. There are many Americans they approve of violence.
 d. *There are many Americans and they approve of violence.

(Lambrecht 1988:330)

Lambrecht は、疑似関係節構文が提示的關係節構文と大きく異なる点として、独自に存在する指示対象を示さない、ということを挙げる。疑似関係節構文においては、先行詞の指示対象は不特定であるばかりでなく、構文外には存在しないものであり、構文を通して初めて存在するに至る。指示対象が独自に存在することを示す(34)とは、その点で、大きく意味が異なるという。

- (34) There are many Americans.

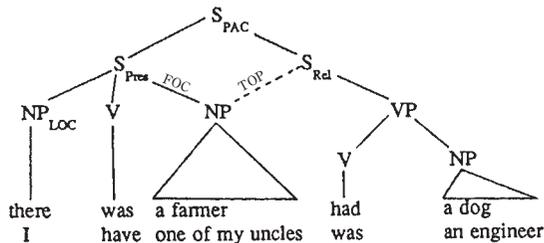
さらに、類例である(35a)は、 S_i に非指示的な名詞句が含まれており、新しい指示対象を談話に導入するという機能をもたないため、(33a)とは異なる構文として、区別されなければならないと主張する。

- (35) a. There are few Americans who like opera.
 b. Few Americans like opera.
 c. *There are few Americans they like opera.
 d. *There are few Americans and they like opera.

(Lambrecht 1988:332)

上で見たように、提示的關係節構文は、一つの文法的単位の中に、指示対象の導入と、それについての叙述を結合するという、談話的機能をもつ。提示的關係節構文における S_1 と S_2 の密接な関係を考えると、*there* や *have* が主節に現れた SCR 構文における関係節主語の欠落には、語用論的な動機づけがあると Lambrecht はいう。Lambrecht は、こうした SCR 構文を提示的融合構文(the presentational amalgam construction)と呼び、情報構造上の要請が文法化されたものとして、次のような構造を提案する。

- (36) The presentational amalgam construction (PAC)



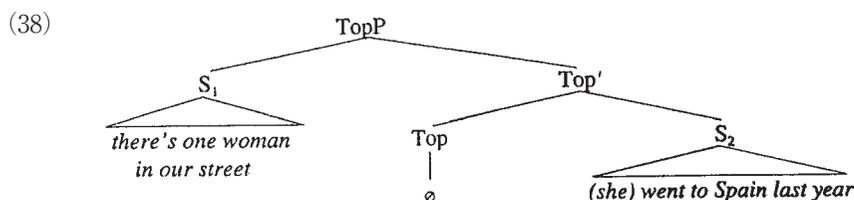
(Lambrecht 1988:335)

SCR 構文の考察を *there* や構文、*have* 構文に限れば、談話機能、情報構造に注目する Lambrecht の説明も、ある程度は理解できるものである。しかしながら、提示的機能に重きを置いたために、(33a)と(35a)の *there* 構文の意味機能上の類似性を見落としている点は問題である。両者とも、変項を埋める値の多寡を述べる、西山(2003、2013)のいう絶対存在文の一種であるという共通点をもつ。さらに、昔話の冒頭に現れる *there* 構文も絶対存在文の一種であり、「しかじかの条件 F(x) 満たすようなものがこれから話す世界に登場する」「F(x) を埋める x の値がこの物語の世界を構成している」(西山 2013:257)ということ述べていると考えることができる。特定の個体の存在と、変項を埋める値の存在との相違には注意を払って、考察を進める必要があると思われる。

次に、den Dikken(2005)の議論を見てみよう。den Dikken が考察の対象とするのは、次のような SCR 構文である。

- (37) a. There's one woman in our street went to Spain last year.
 b. It's always me pays the gas bill.
 c. I have one student can speak five languages.
 d. He's the one stole the money. (den Dikken 2005:694)

マクロのレベルでは、S₁ がトピックであり、談話の中に焦点を据えるはたらきをもつ。その焦点が続く節の anchor となり、コメント節である S₂ において、その anchor に関する付加的な情報が与えられる。こうした SCR の提示機能を反映した、以下のような topic-comment structure を、den Dikken は提案する。関係節のように見えるものは、実は根節(root clause)であり、S₂ は anchor と構成素をなしてはいないという主張である。



(den Dikken 2005:698)

den Dikken が SCR を関係節ではないと考えるのには、いくつかの理由がある。一つは、以下のような文において、二番目の定形動詞の前の NP との間に縮約が起こらないことである。

- (39) a. It is your heart is on fire, not your shop.
 b. *It is / It's your heart's on fire. (den Dikken 2005:695)

このことは、二番目の定形動詞の前の NP がその動詞の実際の主語ではないことを示すという。次に、SCR においては、代名詞を明示することが可能であるが、関係代名詞、あるいは補文標識を伴う関係節では、それは不可能である、という点が挙げられる。

- (40) a. There's one woman in our street *she* went to Spain last year.
 b. *There's one woman in our street who / that *she* went to Spain last year.

(den Dikken 2005:697)

そして、以下のように随伴移動が許されないことによって、SCRの S_2 が anchor と構成をなさないことが示される。

- (41) a. I met a man(who / that) can speak five languages.
b. A man *(who / that) can speak five languages, I met.
- (42) a. John's the one(who / that) stole the money.
b. The one *(who / that) stole the money was John.¹⁰ (den Dikken 2005:699)

SCRに関係詞や補文標識を加えて通常の関係節にすることは可能であるが、通常の関係節すべてがSCRにできるわけではない。den Dikkenは、以下の例でSCRが許されないのは、最初の節が提示的でないためであると説明する。

- (43) a. I fed the dog *(which / that) bit the postman.
b. They went with friends *(who / that) were studying French.
(den Dikken 2005:699)

den Dikkenの提案する(38)の構造に対しては、Haegeman et al.(2015)による批判がある。細部にわたるので、その一部を挙げることにしよう。¹¹

まず、(38)においては、先行詞+SCRは構成素をなしておらず、他の構成素との等位接続は不可能であるように思われるが、実際には、以下に示すように、先行詞+通常の関係節との等位接続が可能であり、一つの構成素であると考えることができる。

- (44) a. I have [one colleague who runs a sushi shop] and [another one who has a burger restaurant].
b. There is [one student who lives in a hotel] and [another one who lives in a renovated railway station].
- (45) a. I have [one colleague runs a sushi shop] and [another one who has a burger restaurant].
b. There is [one student lives in a hotel] and [another one who lives in a renovated railway station]. (Haegeman et al. 2015:65)

また、(38)においては、SCRの先行詞は S_2 をc統御しておらず、 S_2 のNPIを認可することができないと示されるが、(46b)では、(46a)と同様、 S_2 内の *anything* が、先行詞の *no one* によって認可されている。

- (46) a. There is no one who can do anything about it.
b. There's no one can do anything about it. (Haegeman et al. 2015:66)

このことは、SCRにおいても、先行詞が関係節をc統御していると考えなければならないことを示す。さらに、代名詞の束縛に関しても、SCRと通常の関係節で、同様の効果が見られる。(47a)、(47b)ともに、代名詞 *his* が、主節の量化副詞 *always* によって非選択的に束縛された場合、束縛変項の読みをもつ。

- (47) a. There's always_i some student_i [who can't remember his_i password].
 b. There's always_i some student_i [can't remember his_i password].

(Haegeman et al. 2015:66)

これは、SCR の先行詞が関係節を c 統御しないとしたのでは、説明できないことである。

さらに、(38)の TopP 分析では、SCR は埋め込み不可能とされるが、実際には SCR が根節でないことは、次のような例によって示される。SCR は、時や条件を表す節の中に現れ、また、叙實的述語の補語となる。

- (48) a. My head of department is reluctant to intervene for his male students but [when there's a girl wants to see him], he will act immediately.
 b. I'm not available but [if there's a blonde girl with glasses wants to see me], give me a call.
 c. I resent [that there are so many students want to see me].

(Haegeman et al. 2015:68)

このような証拠を挙げて、SCR については Doherty (1993, 2000) の提案するような関係詞化による分析が適切であろうと、Haegeman et al. は論じている。

there 構文や *have* 構文に現れる SCR について、情報構造、談話の機能という観点から説明を行うのは理解できることであるが、統語構造に情報構造を直接、反映させるのは、難しいことであるように思われる。den Dikken (2005) は、(37d) の指定文に関して、(49) の構造を考える。

(49) [_{TopP} [_{S1} *he's the one*] [_{Top} Top = ∅ [_{S2} *ec stole the money*]]] (den Dikken 2005:699)
the one が S₂ と構成素をなすと考えるのではなく、(49) の構造を考えることによって、明らかに S₁ の焦点ではない *the one* ではなく、焦点である *he* が S₂ の anchor であることが示えるという。指定文について提示機能を考える点に無理があるように思われるばかりでなく、談話機能上の焦点の概念と、(倒置)指定文の変項を埋める値の概念とを混同している点でも、den Dikken の議論には問題があるように思われる。

IV. SCR の先行詞の指示性

Doherty (1993, 2000) は、SCR 構文の分布はこれまで考えられてきた以上に広いとして、多様な SCR 構文を紹介している。*there* 構文、*have* 構文、*it* 分裂文以外の例を以下に挙げよう。¹²

Modals / Opaque contexts

(50) I'd like to meet the man would play-act on Larry.

(51) I'm looking for somebody can speak Irish well.

Free-Choice Any

(52) Any man can't fight for his friends had better be dead.

Every, All

(53) She...gave me all the change was in the house.

(54) Every one of my children went to that school, they spelled their names wrong.

Other Copular Sentences

(55) Is that the boy was causing all the bother?

(56) Here's the one'll get it for you.

(57) You're not the first asked me that.

(58) The only one can do it is John.

(59) John's the only one can do it.

The Complement of know

(60) I know a fella can get all the tobacco he wants : Frank Dooley...

(Doherty 1993:157-158, Doherty 2000:72)

Doherty(1993、2000)は、SCR は真の関係節であるが、制限的関係節が CP であるのに対し、SCR は、CP レベルを欠く IP であるという違いがあると考える。次のような例の SCR において副詞的付加詞が容認されないのは、左周辺部に副詞的付加詞が入る場所がないためであると説明する。

(61) a. That's the girl *(who)just yesterday was talking about you.

b. John is the guy *(who)at the pot-luck got really drunk. (Doherty 2000:84)

目的語接触関係節も IP であるため、この位置に付加詞が入ることはできない。

(62) a. That's the man *(who)years ago Mary used to know well.

b. This is the woman *(who)most of the time John likes. (Doherty 2000:63)

Doherty(2000)は、目的語接触関係節との類似点を挙げることにより、SCR は同様に関係節であると論じる。まず、先行詞と SCR には強い結びつきがあり、SCR を先行詞から離して重ねることはできない。

(63) a. Bill is the only one who knows her well who can take that evening off.

b. *Bill is the only one knows Mary well can take that evening off.

(Doherty 2000:81)

同じく、目的語接触関係節も、重ねることができない。

(64) The story (that)Fay wrote *(that) *The Nation* published was about the FBI.

(Doherty 2000:69)

また、SCR も目的語接触節も、NP からの外置が許されない。

(65) a. Anybody (who)can help out afterwards is welcome.

b. Anybody is welcome *(who)can help out afterwards. (Doherty 2000:82)

(66) a. The man (who)Bill knew arrived yesterday.

b. The man arrived yesterday *(who)Bill knew. (Doherty 2000:59)

加えて、制限的修飾という意味機能をもつという点で、SCR は目的語接触関係節や、他の制限的關係節との共通点があるという。

こうした特徴をもつ SCR の限られた分布について、Doherty(1993、2000)は、情報構造によらず、意味的な説明を試みる。(67b)では主語の位置に SCR が現れており、新しい談話の指示対象を文頭に起こらない形で導入するという、提示機能による説明が当てはまらない。

(67) a. John is the only one can do it.

b. The only one can do it is John. (Doherty 2000:91)

実際、SCR は、普遍量化詞のついた名詞句など、情報の新しさや焦点などとは関わりのない環境にも多く現れる。そこで Doherty(2000)は、SCR が認可されるのは、SCR が修飾する名詞句が非指示的である場合のみであるという一般化を行う。¹³ Doherty のいう「非指示的」とは、次のようなことである。

(68) 'non-referential' in the pretheoretical sense that it fails to denote an individual in the real world (an extensional individual) (Doherty 2000:91)

Doherty (2000) によれば、(69a)、(69b)が容認されないのは、SCR の先行詞が個体を指示するためであるという。

(69) a. *The man who worked there was a friend of mine.

b. *I gave a ticket to a man comes every day. (Doherty 2000:90)

Doherty は、(50)-(59)の文に現れる SCR の先行詞は、非指示的であると説明する。例えば、不透明な文脈においては、NP が SCR を伴う場合には、*de dicto* の読みが強く出てくるといふ。*de dicto* の読みは、特定の指示対象を念頭に置かない、不特定の読みである。

(70) a. We want someone that knows John.(*de dicto* & *de re*)

b. We want someone knows John.(*de dicto*) (Doherty 2000:90)

ここで注意しなければならないのは、上の例の不特定の読みにおいても、先行詞は、世界の中の対象を指示していると考えられるということである。不特定の読みをもつ NP を非指示的とみなすような Doherty の「指示性」の規定には問題があることが分かるが、ここではこれ以上立ち入らないことにする。次に、叙述名詞句は、属性を表すもので、個体を指示するものではないことが明らかである。そして、関係節が数量詞を限定する場合も、以下に示すように、SCR が修飾する名詞句は個体を指示しない。

(71) a. Everybody lives in the mountains has an accent.

b. $\forall x$: [x lives in the mountains][x has an accent] (Doherty 1993:92)

このように、指示性によって、SCR の分布に関する一般化を行うことができるが、問題も残ると Doherty(2000)は述べる。第一に、(72)が示すように、叙述名詞句の SCR が容認されない場合がある。

(72) *John is a doctor treats his patient well. (Doherty 1993:83)

第二に、あらゆる数量詞が SCR を許すわけではない。

- (73) a. *?A few people speak Irish live in this parish still.
b. *?Many people speak Irish live in this parish still. (Doherty 1993:92)

容認度が高いのは、*every* や *all* などの普遍数量詞の場合のみである。また、先に見た、(60) のような例も説明されずに残る。しかしながら、この一般化は、SCR だけではなく、主語の空所をもつ後置修飾句('reduced relatives' (Smith 1964))にも、同様に当てはまるという利点があると、Doherty(2000)は指摘する。後置形容詞句によって修飾される名詞句が指示的である場合には容認されにくく、

- (74) a. *I was very grateful to a certain man aware of our difficulties.
b. *?I gave a grammar to a student eager to learn.
c. *A man proud of his daughter congratulated her at the party. (Doherty 1993:92)

there 構文や、コピュラ文に現れる場合には容認される。

- (75) a. There is no-body here (*aware of our difficulties*, etc.)
b. John is the only one (*aware of our difficulties*, etc.) (Doherty 1993:93)

また、不透明な文脈においては、SCR の場合と同じように、*de dicto* の読みがでてきやすい。

- (76) a. a I'd like to find a person (*aware of our difficulties...*)
b. I'm looking for a person (*eager to learn*, etc.) (Doherty 1993:93)

さらに、数量詞を伴う場合に、SCR と同様の容認度の違いを示す。

- (77) a. Everybody aware of this problem was at the meeting.
b. ?Many people aware of this problem was at the meeting. (Doherty 1993:93)

先に、*there* 構文、*have* 構文、指定文に関しては、変項名詞句の概念を用いて SCR の容認性を説明する可能性を示唆したが、さらに、様々なタイプの SCR 構文や形容詞句後置修飾構文を、先行詞名詞句の指示性という観点から検討するのは、非常に興味深いことであると思われる。*there* 構文は、どの種の存在文と解釈するかによって、SCR の先行詞や、後置形容詞句に修飾される名詞句の指示性が明確になるので、考察の助けとなる。また、潜伏疑問文の述語の項の位置に現れる名詞句も変項名詞句であると考えられ¹⁴、その位置に現れた SCR の先行詞や、後置形容詞句に修飾される名詞句が非指示的であることが理解しやすい。不十分ながら、確かに名詞句の指示性が、SCR や後置形容詞句修飾の容認性に関与していると思われる例を、いくつか見てみることにしよう。まず、SCR の例を挙げることにしよう。(78)は、「この大学の教授がノーベル賞を取った」という絶対存在文としての解釈は可能であるが、「ノーベル賞を取った教授が今、大学の庭にいる」というような場所存在文の解釈はできない。

- (78) There is a professor won the Nobel Prize at the university. (cf. 熊本 2005)

(79)は、「助けてくれる人としてジョンがいる」というリスト存在文であり、この場合も SCR が許される。

(79) There is John can help you.

(80)は、「誰があなたの病気を治せる医者であるかを知っている」という潜伏疑問文として解釈できるが、定名詞句を指示的にとった「あなたの病気を治せるような、特定の医者を知り合いである」という解釈はできない。

(80) I know the doctor can treat your illness.

次に、形容詞による後置修飾の例を挙げておこう。(79)同様、(81)もリスト存在文の解釈をもち、形容詞による後置修飾が可能な例である。

(81) There is John ready to help you.

(82)は、「誰がこのプロジェクトの責任者であるかを知っている」という潜伏疑問文としての解釈は可能であるが、「プロジェクトの責任者である、特定の人と知り合いである」という解釈はしにくい。

(82) He knows the person responsible for this project.

(83)は、「誰が立案に向いているかについて、意見が異なる」という潜伏疑問文の解釈は可能であるが、「立案に向いた、特定の人物に関する見解が異なる」という解釈は出てきにくい。

(83) They don't agree on the person suitable for the planning.

これらの例は、変項名詞句が先行詞+関係節の解釈に関わる場合には、SCR や形容詞句による後置修飾を用いることができることを示している。数少ない例に基づく推測であるが、NP+SCR、あるいは、NPの形容詞句による後置修飾には、個体としてではなく、出来事、状況としての把握が反映されていると考えることができるのではないと思われる。SCRが修飾節ではなく主節としての機能をもつという主張も、こうした捉え方と関連づけることができるかもしれない。変項名詞句は個体を指示するものではなく、命題関数を表すものであるという観点から、変項名詞句が関与するSCR構文の容認度を検討するのは、今後の課題である。先行詞が指示的でありながら、SCRや形容詞句による後置修飾が容認される(79)や(81)があるということから、先行詞の指示性だけでは、これらの構文の容認度は説明できず、Doherty(2000)の一般化には、修正を加えなければならないことが分かる。非指示的名詞句としては、変項名詞句ばかりでなく、叙述名詞句も対象とし、名詞句の指示性のみならず、名詞句の特定性も考慮に入れて、さらに考察を深める必要があると思われる。

V. 結語

本稿では、主格の関係代名詞が省略されたSCRについて、これまでに提案された分析をもとに、統語的、意味的、語用論的特徴を検討し、分布に関する制約を探った。その上で、変項名詞句が解釈に関与する場合には、先行詞自体の指示性に関わらず、SCRや形容詞句による後置修飾が容認されるという提案を行った。提示機能という談話構造上の概念に基づく分析は、多様なSCR構文の一部がもつ機能を捉えることしかできない。先行詞の指示性

に注目した Doherty(2000)の分析は、指示性の規定が不十分であり、すべての例を適切に説明するものではないが、今後の考察の方向性を示すものであると考えられる。さらに考察の対象を広げ、残る問題については、別稿を改めて検討することとしたい。

*本研究は、令和2年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「コンピュータ文の意味構造と名詞句の定性に関する研究」(課題番号:17K02684)(研究代表者:熊本千明)の助成を受けたものである。有益な助言を下された西山佑司先生、例文のチェックをして下さった Richard Simpson 氏に謝意を表す。

註

1. 英語には「は」と「が」の区別がなく、(1e)が指定文として意図されているかどうか、定かではない。Doherty(2000)、den Dikken(2005)に指定文／倒置指定文に関する議論が見られるので、ここでも指定文と解釈することにする。
2. 西山の分類では、この他に、「帰属存在文」(例:K大学図書館に、太郎が読みたい本がある)がある。これは、「LニAガアル／イル」の形式をもち、Aの指示対象がLの表す構成員の集合に属している、ということを主張するものである(西山 2013:277)。
3. Prince(1981)は、情報の新旧について論じる際、assumed familiarity(聞き手側に想定される熟知度)を、まず、大きく、Brand New(真新しいもの)、Inferable(推論可能なもの)、Evoked(活性化されたもの)と分類している。
4. このような語句の挿入は、*it* 分裂文においても可能であるという。
 - (i) It was Sam, as you know, that Lucy was talking to. (McCawley 1981:106)
5. これは、リスト存在文の例である。ある変項の値を埋めるものとして具体的な値が存在することを述べるリスト存在文にも、[...x...]という命題関数を表す変項名詞句が介在している(西山 2003、2013)。
6. McCawley(1981)は、多重関係節について、制限節が重なった(ia)と(ib)は、関係節の現れる順序に関係なく、真理条件が同一であるが、疑似関係節を含む(ia)と(ib)では、関係節の順序が逆になると、真理条件が異なると述べている。
 - (i) a. Many Americans who wants to reinstate the death penalty who wrote in Spiro Agnew for President subscribe to *the Readers' Digest*.
(死刑復活に賛成し、大統領選でスピロ・アグニューに投票したアメリカ人の多くは、リーダーズ・ダイジェストを購読している)
 - b. Many Americans who wrote in Spiro Agnew for President subscribe to *the Readers' Digest*.
(大統領選でスピロ・アグニューに投票し、死刑復活に賛成しているアメリカ人の多くは、リーダーズ・ダイジェストを購読している)
 - (ii) a. There are many Americans who want to reinstate the death penalty who wrote in Spiro Agnew for President.

(死刑復活に賛成しているアメリカ人の多くは、大統領選でスピロ・アグニューに投票した)

- b. There are many Americans who wrote in Spiro Agnew for President who want to reinstate the death penalty.

(大統領選でスピロ・アグニューに投票したアメリカ人の多くは、死刑復活に賛成している) (McCawley 1981:114 河野・訳)

2,000万人のアメリカ人が死刑復活を望み、20,000人のアメリカ人がスピロ・アグニューに投票したと仮定した場合、その20,000人のうちの19,000人が死刑復活を望んでいるならば、(iib)は真であるが、(iia)は偽であるという。McCawley(1981)によれば、(iia)は、死刑復活に賛成しているアメリカ人について、その多くが(a large fraction of them)、大統領選でスピロ・アグニューに投票したということ、(iib)は、大統領選でスピロ・アグニューに投票した人アメリカ人について、その多くが(a large fraction of them)、死刑復活に賛成しているということ述べているという。西山(個人談話)は、こうした解釈は、絶対存在文としての解釈ではなく、検討が必要であると指摘する。*many*が弱い数量詞(weak quantifier)であり、相対的な概念を表すとすると、上で見たような、「全体に対する割合」という強い数量詞(strong quantifier)の解釈は出てこないはずであるし、また、絶対存在文に、強い数量詞が現れることはない(西山 2003、2013)からである。

(iii) a. 笑った多くの／3人の／幾人かの学生がいる。(絶対存在文)

b. ?笑った全ての／大部分の学生がいる。(絶対存在文) (西山 2013:265-266)

河野(2012)は、疑似関係節構文において、二つの関係節が多重構造をなしている場合には、常に、第二関係節が疑似関係節になり、第一関係節が制限節になること、つまり、二つの関係節がどちらも疑似関係節であることはなく、第一関係節が疑似関係節で、第二関係節が制限節であることもないことを、指摘している。もし、河野の観察が正しく、McCawleyが他のところで述べているように、(iva)の自然な解釈は(ivb)であるとするならば、

(iv) a. There are many Americans who like opera.

b. Many Americans like opera. (McCawley 1981:115)

(iia)、(iib)は、それぞれ次のようにパラフレーズすることが可能であるはずである。

(v) a. Many Americans who want to reinstate the death penalty wrote in Spiro Agnew for President.

b. Many Americans who wrote in Spiro Agnew for President want to reinstate the death penalty.

その上で、(iia)、(iib)は絶対存在文であり、*many*は弱い数量詞であるとするならば、(v a)、(v b)の解釈は、(iia)、(iib)の河野訳のようなものではなく、西山の指摘に従って、以下のようなものであると考えることができるであろう。

(vi) a. 多くの、死刑復活に賛成しているアメリカ人が、大統領選でスピロ・アグニューに投票した。

b. 多くの、大統領選でスピロ・アグニューに投票したアメリカ人が、死刑復活に賛成している。

(iia)、(iib)の絶対存在文としての解釈と、McCawleyの示す解釈との相違については、さらに考察を進める必要があると思われる。

7. 疑似関係節が現れる次のような文は、Nixon 以外にそのような人はいない、アメリカ人にそのような人はいない、という、negative existential proposition を表していると McCawley はいう。

(i) a. Nixon is the only President, as you may have heard, who ever resigned.

b. I've never met a person, of course, who doesn't like pizza. (McCawley 1981:107)

8. これは、存現文の一種であると思われる。このタイプの *there* 構文も同様に扱って良いかどうかについては疑問が残る。
9. 牛江(2007)の訳語を用いることにする。
10. 倒置指定文の主語位置の SCR は、Doherty(1993、2000)においては容認されている。
11. den Dikken によれば SCR の先行詞は焦点であるが、この構成素が統語的な焦点の位置を占めていることが(38)には表示されていない、という問題点も Haegeman et al. (2015)は、指摘する。
12. Doherty(1913)が主格の関係詞を欠く関係節を論じる際、*any*、*every*、*all* を先行詞に含む関係節、先行詞が叙述名詞句である関係節、先行詞が不透明な文脈におかれた関係節、*it* 分裂文に現れる関係節など、性質の異なる関係節を区別なく扱っているとして、河野(2012)は、Doherty(1913)を批判する。例えば、*it* 分裂文については、その関係節は情報構造上、前提を表すという点で、関係節が断定を表す疑似関係節とは異なるということ、固有名詞や従属節(*because* 節など)を先行詞として取りうる点で、通常の制限節とは異なるということなどを挙げ、一括した分析には問題があると考える。
13. 田中(1996)は、SCR は IP であり、非指示的な名詞句は束縛条件に関係しない、と仮定する Doherty(1993)の分析は、一般的な束縛条件から SCR の認可条件を説明する良い方法であるが、CP 投射と IP 投射を認める点で、経済性の問題が残ると論じている。
14. 西山(2013:379)によれば、潜伏疑問文(i)の斜体部分は、(ii)のような変項名詞句としての機能をもつという。

(i) John announced *the winner of the contest*. (Baker 1968)

(ii) [x is the winner of the contest]

この x が *wh* 化されて、(iii)の解釈をもつと説明される。

(iii) Who is the winner of the contest?

参考文献

- Baker, Carl Lee (1968) *Indirect Questions in English*. Ph. D.diss., University of Illinois.
- Declerck, Renaat (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*. Leuven : Leuven University Press.
- den Dikken, Marcel (2005) "A comment on the topic-comment," *Lingua* 115, 691-710.
- Doherty, Cathal (1993) "The syntax of subject contact relatives," *Proceedings of CLS* 29, 155-169, Chicago Linguistic Society.

- Doherty, Cathal(2000) *Clauses Without 'That' : The Case for Bare Sentential Complementation in English*. New York : Garland Publishing.
- Haegeman, Liliane, Andrew Weir, Lieven Danckaert, Tijs D'Hulster and Lisa Buelens(2015) "Against the root analysis of subject contact relatives in English," *Lingua* 163, 61-74.
- Higgins, Francis Roger(1979) *The Pseudo-cleft Construction in English*. New York : Garland Publishing.
- Jespersen, Otto(1961) *A Modern English Grammar on Historical Principles*. London : George Allen & Unwin.
- 河野継代(2012)『英語の関係節』東京:開拓社.
- 熊本千明(2005)「存在文と指定文の接点をめぐって」『九州英文学研究』第22号, 1-14.
- Lambrecht, Knud(1988) "There was a famer had a dog : Syntactic amalgams revisited," *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 319-339.
- McCawley, James D.(1981) The syntax and semantics of English relative clauses," *Lingua* 53, 99-149.
- McCawley, James D.(1998) *The Syntactic Phenomena of English*, 2nd ed. Chicago : University of Chicago Press.
- 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論』東京:ひつじ書房.
- 西山佑司・編著(2013)『名詞句の世界』東京:ひつじ書房.
- Prince, Ellen(1981) "Toward a taxonomy of given-new information," in P. Cole(ed.), *Radical Pragmatics*, 223-255. New York : Academic Press.
- Smith, Carlota(1964) "Determiners and relative clauses in a generative grammar of English," *Language* 40, 37-52.
- 田中紀男(1996)「疑似関係節と主要部形成について」『天理大学学報』183, 1-16.
- 牛江一裕(2007)「疑似関係節とその関連構文」『英語語法文法研究』第14号, 37-51.